

ひたちなか 埋文だより 56



雪を纏った虎塚古墳 ここ数年は雪が降っても積もることはほとんどなかったのですが、今年も雪は積もらないのかなと思っていた正月休み明け、久しぶりに本格的に雪が降り、写真のように雪を纏ったきれいな虎塚古墳を見ることができました。虎塚古墳に雪が積もるといつも思い出すのが、虎塚古墳の発掘調査とその後の保存に永くご尽力いただいた明治大学の小林三郎先生です。昔、虎塚古墳に雪が積もった翌日、市の担当者に「石室が心配だから、石室の上の雪を除去して欲しい」と電話があったそうです。小林先生がいつも虎塚古墳を気にかけていたことを物語るエピソードです。このような古墳に対する愛と努力が、現在の虎塚古墳の保存状態につながっています。 (2022.1.7)

第18回企画展 海、古墳—海洋民の痕跡を探る—

公開講座「ひたちなか市の考古学」第14回 古墳時代の交流

「私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—」第5回 発掘三昧への道 県内編2 (瓦吹 堅)

資料紹介 ひたちなか市出土石製紡錘車の形態分類と石材 (佐々木義則・矢野徳也)

横穴墓を歩く⑦ 権現山横穴墓群 (川口武彦)

ひたちなか市内の発掘調査 2021

ひたちなか市の遺跡⑨改訂版 大島・田彦中学区編

のぞき見、展示室③ 武田石高遺跡のトトロ口石器

ワンケース・ミュージアム 54 ひたちなか市の石製紡錘車

歴史の小窓⑦ ふるさとの名を記す

ほか

第18回企画展

海、古墳

—海洋民の痕跡を探る—



日時：令和4年2月11日（金・祝）から5月8日（日）
午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日） 入場無料

場所：ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499
電話：029-276-8311
（公財）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

第18回企画展

海、古墳

—海洋民の痕跡を探る—

2022年2月11日（金・祝）～5月8日（日）



ひたちなか市の海岸部には、一〇〇基を超える古墳が存在しています。このように狭い範囲に古墳が密集する例は、茨城県内でも数少ない事例です。二〇一一年以降、海岸部の古墳の調査例が増え、海と関わりのある古墳群であることが判明してきました。そして、この「海の古墳」が、太平洋沿岸を中心として展開していることが注目されています。また、虎塚古墳や十五郎穴横穴墓群の築造の背景にも、海を通じた交流があることも判ってきました。

展示では、「海の古墳」に注目し、出土遺物を通して古墳時代における海を介した活動や交流を検討しました。

海の古墳、出現 ひたちなか市では古墳時代の前期に造られた古墳は見つかっていません。しかし、那珂川対岸の大洗町では、前期の初めから中期に入るまで古墳が継続する場所があります。それが磯浜古墳群です。古墳群は鹿島臨海鉄道大洗鹿島線の大洗駅の東側、太平洋に面する鹿島台地の北端部に位置しています。東は太平洋、西は涸沼・涸沼川、北は那珂川で、南は台地が切れ、まるで島状の台地に古墳が展開しています。この立地から水上交通の要衝であったことが容易に想像できます。古墳は、前方後円墳二基、前方後方墳一基、大型円墳一基、墳形不明二基の総数六基で群を構成しています。その中で全長一〇一mの目下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳は、当時この地域最大級の前方後円

墳です。古墳群が水上交通の要衝にあることから、那珂川河口域の海の古墳のはじまりが磯浜古墳群であるといえるでしょう。

磯浜古墳群が終焉を迎える頃、ひたちなか市の海岸部で古墳の築造が始まります。三ツ塚第三古墳群です。最初に築造されるのは、約七〇mの帆立貝形古墳の第13号墳と約五〇mの大型円墳の第12号墳です。注目される遺物として、第12号墳から出土した壺形埴輪があげられます。この埴輪は磯浜古墳群の目下ヶ塚古墳や車塚古墳から出土した壺形埴輪の影響がみられるもので、特異な形を呈しています。この類似から、磯浜古墳群との関連をもつて、三ツ塚第三古墳群が成立してくる考えられます。

ひたちなか海浜古墳群 市内の太平洋を望む台地縁辺部には、北から五世紀後半の市域最大規模の前方後円墳である川子塚古墳や磯崎東古墳群、磯合古墳群、入道古墳群、三ツ塚古墳群、新道古墳群などがあり、直線で約3kmにわたって一〇〇基以上の古墳が連なるように存在して



三ツ塚12号墳の壺形埴輪

*市内柳沢にある寺前古墳が前期の古墳の可能性がります。

います。

群を構成する古墳は直径一五m前後の円墳が主体で、そのほかに約八一mの前方後円墳の川子塚古墳、磯崎東33号墳や三ツ塚第三・13号墳の帆立貝形古墳もあります。また、三ツ塚第三・2号墳のように墳丘の高さが1mと低いものや、墳丘をもたない石棺墓も存在します。埋葬施設には、石棺や竪穴式石室、横穴式石室があり、石材には海岸の石が利用されています。さらに、墳丘の上に石を敷き詰める「葺石」のみられる古墳が多く、葺石のある古墳は市内で唯一ここだけです。

出土遺物には、珠文鏡や大刀、鉄鏃、骨鏃、鹿角装刀子、埴輪、須恵器、土師器、ガラス小玉、石製模造品などがあります。

時期は、出土遺物から五世紀前葉から七世紀中葉までの間、ほぼ継続して古墳が造られていたと考えます。このことは、市内の他の地域が六世紀以降に古墳の築造が開始されることと対照的です。また、臨海部ではその周辺も含めて集落の存在が確認されています。よって、臨海部の地域が長期間にわたって墓域であったことも窺えます。

以上のように、臨海部の古墳には市内でこの地域のみ限定される特徴があり、地理的にも古墳が連なる様相を呈していることから、これらの古墳をまとめて「ひたちなか海浜古墳群」と称しています。

ひたちなか海浜古墳群とひたちなか市の石棺墓

展示のナビゲーターの虎塚ちゃん (ヨスミナミさん作画)

ひたちなか海浜古墳群の特徴の一つに、海を強く意識した墓制であることがあげられます。それをもっともよく示しているのが、海を臨む斜面部につくられた石棺墓です。斜面部にある石棺墓は、磯崎東古墳群、入道古墳群、三ツ塚第二古墳群で確認しており、ひたちなか海浜古墳群中に広く分布していることが判つてきました。市内で記録に残る最初の例は一九六〇年に入道古墳群で一基を確認したもので、その後一九六八年に三ツ塚第二古墳群で八基、一九七四年に入道古墳群で二基、二〇一一年から二〇一六年にかけて磯崎東古墳群で九基、二〇二〇年に入道古墳群で六基の合計二六基の石棺墓を確認しています。

石棺墓についてその特徴をあげると、海が目の前に広がる斜面部に位置していること、石棺は磯の石を利用し、基本的には短軸方向に一つずつ、長軸方向に四つずつの石で石棺を構成していること、床面には石材はなく海砂が敷かれていること、分布状況は斜面の中段から上段にかけて二段もしくは三段に構築されており、それはまるで横穴墓の配置のようにみえること、石棺墓の上の台地平坦面には墳丘を有する古墳が存在すること、出土遺物はほとんどなく人骨のみが出土することなどがあげられます。

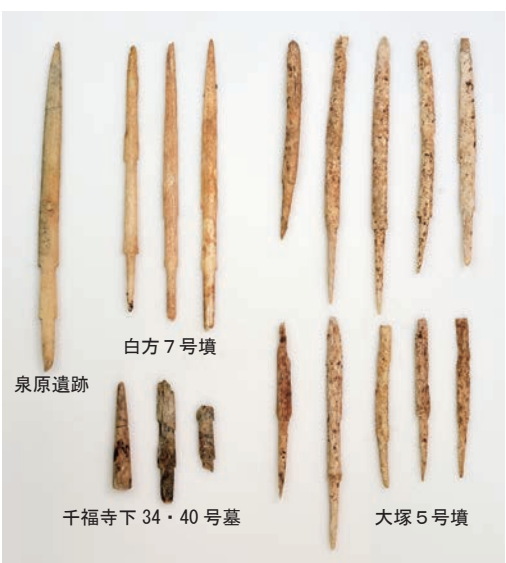
ひたちなか海浜古墳群で確認した石棺墓は、類似するものが茨城県では東海村白方古墳群や日立市河原古墳群、北茨城市神岡上古墳群で

も確認できます。石棺墓に伴う希少な遺物として、三ツ塚第二・3号墓や白方古墳群、河原古墳群の石棺墓から共通して刀子が出土していることは注目です。

茨城県外の地域では、神奈川県三浦市勝谷砂丘遺跡や鎌倉市長谷小路周辺遺跡、和歌山県白浜町脇ノ谷古墳、福岡県行橋市稲堂古墳群などの埋葬施設との類似性があります。その中でも三浦半島に位置する勝谷砂丘遺跡周辺では、墳丘を持つ古墳（前方後円墳・円墳）の雨崎古墳群や横穴墓の雨崎横穴墓群、洞穴の雨崎洞穴と、半径五〇mの範囲に多様な墓が集中しています。三ツ塚古墳群でも半径五〇〇mの範囲に墳丘を伴う古墳・石棺墓・横穴墓といった様々な墓が存在しており、範囲が少し広く洞穴はないという違いはありますが、三浦半島との類似性がみられます。

三浦半島とひたちなか市との共通性に関しては、神奈川県西川修一さんは、三浦半島は南の海の出入口、ひたちなか市は北の海の出入口として、海上交通の要衝であることを理由の一つとしてあげています「西川二〇一六」。

海の古墳と遺物 石棺墓が海岸部を主体として、茨城県から九州まで太平洋沿岸を中心に点々と分布していることをご紹介しましたが、石棺墓と同じように海岸部の墳墓から出土する遺物があります。それが骨鏃とイモ貝装馬具です。今回の展示では、茨城県内から出土した骨



茨城県内の骨鏃



二本松古墳出土のイモ貝装馬具



現生のイモ貝

鏃すべてと、イモ貝装馬具を展示しました。**骨鏃**は、鉄ではなく鹿の足の骨などでつくったヤジリ状のものです。ひたちなか市では磯崎東古墳群第24号墳から二点、第34号墳付近の古墳から一点が出土しています。この他に県内では、日立市千福寺下34・40号横穴墓、同市泉原遺跡内古墳、東海村白方7号墳、かすみがうら市大塚5号墳の合計五遺跡から出土して

います。県外ではいわき市でも出土例があります。これらの墳墓の時期は六世紀から七世紀前半に位置づけられ、同時期というわけではありません。しかし、立地は海岸沿いや久慈川河口域、恋瀬川が霞ヶ浦に注ぐ場所と、水上交通の要所と思われる場所から出土しているという点で共通性が見出せます。全国的には、九州南部と関東、東北の太平洋岸に集中しており、横穴墓や地下式横穴墓からの出土が多い特徴もみられます。

イモ貝装馬具は、南海産のイモガイの頭の部分を使用した、装飾を施した馬具です。このイモ貝装馬具は笠谷6号墳を含めて県内では東海村二本松古墳、銚田市天神山4号墳、常総市七塚1号墳の四例しかなく、時期もみな七世紀前半とされます。この他に、常陸太田市幡山26号墳から出土した馬具もイモ貝は付いていませんが、二本松古墳の馬具に形状が似ていることからイモ貝装馬具の可能性があります。近隣では、福島県いわき市でも中田横穴墓など四遺跡で出土しています。イモ貝装馬具を出土した古墳の立地を見ると、常総市七塚1号墳以外は海岸沿いに位置しています。全国的には、九州、特に福岡県に多く分布し、次いで遠州灘沿岸から福島県いわき地域の太平洋側に集中して分布していることが指摘されています〔中村二〇一四〕。

ご紹介しました海岸部の石棺墓や骨鏃、イモ

貝装馬具のほかにも、虎塚古墳のような装飾古墳、十五郎穴横穴墓群のような横穴墓も九州との関係がある墳墓であることから、ひたちなか市の古墳には九州を含めた海を臨む地域とのさまざまな交流が想定できます。

海、古墳 では、海を介した交流には、どのような背景があるのでしょうか。この問いかけの一つの手がかりとして、江戸時代の北関東の海運が参考となります。江戸時代、東北地方の米などの物資を江戸へ運ぶ場合、太平洋を南下してきた船は那珂川河口のひたちなか市那珂湊を中継地として、外洋から那珂川・涸沼川へ入り、一部陸送して巴川から北浦そして利根川をさかのぼり、千葉県野田市の関宿から江戸川を通して江戸へ到達する経路が使われていました。この経路の活用で那珂湊は大いに栄えました。千葉県の銚子沖は海流の影響で現在も海の難所といわれており、そこを避けて安全に東京湾へたどり着く経路として、那珂湊からの内水面ルートが活用されました。もちろん、古墳時代にまったく同じ経路は存在しませんが、海流の影響により那珂川河口域が海と内水面とをつなぐ要所であったと考えることができます。

よって海と内水面とをつなぐ要所として那珂川河口域には人やモノが集中し、その結果これまで紹介して

きた水上交通と関係する古墳や遺物がこの地域に存在するものと推測します。そして、遺物からはヤマト王権が深く関与していたことを示す資料がある反面、そのなかに畿内に分布の中心をもたない遺物があることは、ヤマト王権主導ではない、地域を主体とする地域間交流が展開されていた可能性を示唆しています。そしてその交流には「海洋民」の活躍があったと考えます。その海洋民の墓がひたちなか海浜古墳群であり、交流の一つとして九州とのつながりを示す墓が虎塚古墳と十五郎穴横穴墓群ではないでしょうか。（稲田健二）

参考文献 白石真理二〇三「古墳を歩く3 三ツ塚古墳群」『フィールドノート』15 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社／中村友昭二〇一四「琉球列島産品製からみた地域間交流」『古墳時代の地域間交流 第二七回九州前方後円墳研究会 大分大会』九州前方後円墳研究会／西川修二二〇一六「相模湾沿岸部における古墳時代の臨海性墓制について」『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』株式会社斉藤建設



海でつながる墳墓や遺物の分布

★今回の企画展の開催及び本誌への記事の掲載にあたっては、以下の機関及び関係者からご指導とご協力をいただきました。

かすみがうら市・北茨城市・東海村・常陸太田市・銚田市の各教育委員会・日立市郷土博物館

猪狩俊哉・大内みなみ・大久保隆史・大場靖之・大淵淳志・片平雅俊・斉藤新・夢沼香未由・早川麗司・林 恵子・矢野徳也・山口憲一

(50 首順・敬称略)

公開講座「ひたちなか市の考古学」第十四回
古墳時代の交流

令和四年二月一九日から三月一二日に、公開講座「ひたちなか市の考古学 古墳時代の交流」を開催しました。講師には、古墳時代の研究者をお招きして、最新の研究成果をもとに、古墳時代のさまざまな交流についてご講演を頂きました。

なお、今回の講座の内容については、後日、記録集を刊行する予定です。



月/日	演 題	講 師
2/19 (土)	石製模造品からみた交流	福島県郡山市大安場史跡公園 佐久間 正明 氏
2/27 (日)	ガラス小玉からみた交流	東京都大田区立郷土博物館 齋藤 あや 氏
3/ 5 (土)	臨海部の古墳からみた交流	(公財) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 稲田 健一
3/12 (土)	古墳と海洋民	神奈川県立旭高校 西川 修一 氏



神奈川県立旭高校
西川 修一 氏

「海洋民文化には、海洋民そのものを示す考古遺物があります。また、海洋民の関与が濃厚な海洋民系文化といえるものがあります。そして、古墳文化の中に海洋民文化の影響を受けているものがあります。ですので、海洋民文化を理解するためには、文化要素を重層的に切り分けて考えていくことが重要だと思います。また未来の人たちに批判されない様に、過去から受け継いだ文化遺産の価値を考えましょう。」



東京都大田区立郷土博物館
齋藤 あや 氏

「ガラス小玉は点数が多く、種類も変化するため、交流や流通を捉えるのに適しています。後期前半までは、ガラスの入手が制限され、王権との関わりがあると考えられますが、後期後半から終末期にはそこを介さない流通が増えたことで、ガラス小玉や玉類の組成に地域差が生まれたと推定されます。」



福島県郡山市大安場史跡公園
佐久間 正明 氏

「石製模造品の全国的な展開を考える際、大洗町の日下ヶ塚古墳が重要な位置にあることは言うまでもありません。それは、奈良県奈良市の富雄丸山古墳との関係にとどまらず、関東各地の古墳にも影響を及ぼした可能性が指摘できるからです。」

歴史の小窓 その二七

ふるさとの名を記す

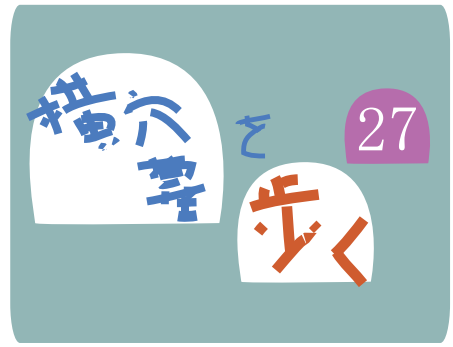


「歴史の小窓 その二」では、神に捧げものをした人の名を書いた墨書土器を取り上げましたが、今回は地名が書かれた土器についてです。

内外面に、「高月」と書かれています。私はこの「高月」を久慈郡高月郷出身の人がふるさとの名を記したものと考えました。出土したのは奈良時代終わりごろの武田西境遺跡第二五五号住居跡です。武田西境遺跡は那賀郡武田郷に比定されるので、この住居に住んでいた人は久慈郡からの移住者であったと推測しています。土器に自分の出身地を記すことで、「この賄を捧げたのは久慈郡高月郷からきた私ですよ。」と、冥界からやってくる鬼や神に伝え、災いから逃れようとしたのでしょう。

このように地名墨書土器は、古代の移住を考える資料となる可能性があります。移住者は新たな土地で周りの人々と新たな関係を取り結びながらも、自分の故郷とは特別なつながりを持っていたのです。それは今の私たちとあまり変わらないように感じられます。

(佐々木義則)



茨城県水戸市
ごんげんやま
権現山横穴墓群

川口 武彦

(水戸市埋蔵文化財センター)

権現山横穴墓群は、茨城県水戸市下国井町字権現山下二二三七番地一帯に展開する横穴墓群で、現在は水戸市七ツ洞公園内にあるサーペンタインと呼ばれる池の底に沈んでいます。権現山横穴墓群は江戸時代に中山信名が編纂した『新編常陸国誌』にも記載があり、天明七（一七八七）年には既に露出していたようです。本格的な調査は一七五年後の昭和三七（一九六二）年三月から四月にかけて『水戸市史』の編纂に伴い行われた発掘調査で、四基の横穴墓が確認されました（表1）。確認された四基の横穴墓のうち、副葬品から年代が分かるのは一号横穴墓と四号横穴墓です。

一号横穴墓は、出土した土師器の杯と須恵器の提瓶（写真3）の形態的特徴から七世紀前葉頃に被葬者が埋葬される際に副葬されたと考えられます。また、四号横穴墓は出土した鉄鍬（図1）が無茎腸扶類五角形鍬に分類されるものであること

から、一号横穴墓と同様に七世紀前葉に被葬者が埋葬される際に副葬されたと考えられます。

他方、二号横穴墓は玄室左右の両壁に甲と鍬を描いた線刻壁画が残されている点で他の横穴墓とは異なっていますが、一号・四号横穴墓と同様に七世紀代の年代が想定されています。

四基の横穴墓は普段は池の底に沈んでいますが、浚渫時に池の水が引いて姿を現す事があります（写真1）。横穴墓は十数基が群集して造営されることが多いため、四基という数は少な過ぎる印象がありますが、平成六年三月に撮影された権現山横穴墓群の遠景（写真2）を見ると、一〜四号横穴墓の北側（写真右側）に横穴墓らしき空洞が四箇所（矢印部分）で確認されるので、未調査の横穴墓がこの斜面の地下に数多く眠っていると考えられます。本横穴墓群の全容解明に向けた学術調査の実施が俟たれます。



写真1 横穴墓玄室内の現況

表1 権現山横穴墓群 横穴墓一覽

番号	前庭部規模	玄室規模	出土遺物	壁画
	全長×最大(最小)幅	全長×最大(最小)幅×高さ		
1号	2.3 × 1.9 (0.9)	2.2 × 1.8 (1.5) × 1.35	須恵器提瓶1, 土師器杯1	玄室両壁(馬具の一部)
2号	1.4 × 1.3 (0.8)	2.3 × 1.8 (1.5) × 1.5		玄室両壁(甲・鍬)
3号	1.3 × 1.2 (0.7)	2.4 × 1.5 (1.1) × 1.45	ガラス製小玉2	
4号	2.8 × 2.2 (0.85)	2.2 × 1.7 (1.4) × 1.25	人骨(歯), 鉄鍬1, 水晶製切子玉8, ガラス製丸玉4, 耳環2	



写真3 1・4号横穴墓出土遺物

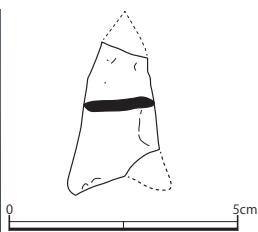
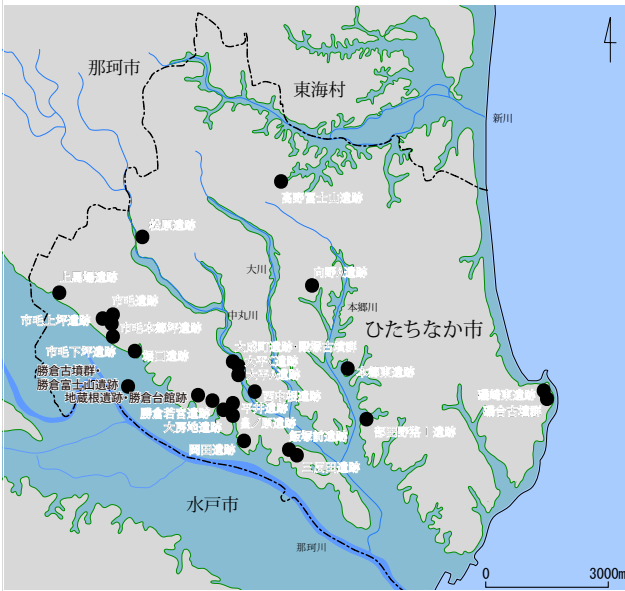


図1 4号横穴墓出土鉄鍬（調査報告よりトレース）



写真2 権現山横穴墓群遠景（平成六年3月撮影）

No.	遺跡名	次数	所在地	種別	時期	遺構・遺物
36	はたのはらいせき 富ノ原遺跡	4次	金上	試掘	2月	住居跡5基, 土坑跡2基, 溝跡2条, ビット24基を確認。土師器, 須恵器が出土。
37	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	18次	高野	本調査	2月	住居跡2基(古墳1, 時期不明1), 土坑1基, ビット16基を確認。土師器, 炭化材が出土。
38	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	19次	高野	本調査	2月	住居跡2基, ビット7基を確認。土師器, 須恵器, 炭化材が出土。
39	いそあいでんぐん 磯谷古墳群	7次	磯崎	試掘	2月	古墳2基を確認。遺物なし。
40	うちでいせき 内手遺跡	4次	三反田	試掘	3月	住居跡3基(平安1, 時期不明2), 土坑1基, 溝跡3条, ビット8基を確認。土師器, 須恵器が出土。
41	おおぼうちいせき 大房地遺跡	20次	勝倉	試掘	3月	溝跡2条(時期不明)を確認。縄文土器, 弥生土器, 煙管が出土。
むかいのえいせき 向野A遺跡		9次	馬渡	本調査	10月	溝跡4条を確認(8次調査の中世溝跡1条, 時期不明3条。縄文土器, 須恵器が出土。)





→竈で確認された遺物
(大平C遺跡第九次調査)

二〇二一年度は、ひたちなか市内において市内遺跡調査として三三件の試掘調査と八件の本調査を実施したほか、向野遺跡群の本調査を実施しました。

本郷東遺跡第八次調査では、約二・四×一・八mの小さな住居跡から、明かりを灯す器に使用された灯明皿が出土しました。また、大平C遺跡第九次調査では、古墳時代後期と考えられる竈が良好に残った住居跡が確認され、そこから杯やお米を蒸かすのに使用された甑などが、ほぼ完形の状態で一三点出土しました。

向野遺跡群第九次調査では、昨年度の八次調査で確認された溝跡の続きが確認され、第三号溝跡が途中から二つに分かれることが判明しました。また、過去に樹木が倒れた風倒木痕と考えられる場所からは、大量の縄文土器片が出土しています。向野遺跡群の発掘調査は、二〇二一年度が最後になり、報告書が刊行されます。(田中美零)





みなさんは、トトロ口と聞くとどのような状態のものを想像するでしょうか。今回ご紹介するのは、武田石高遺跡で出土したトトロ口石器です。

トトロ口石器はその名の通り、表面が溶けツルツとした見た目の石器です。「異形局部磨製石器」などとも呼ばれており、先端は尖らずに表面がとてなめらかで、石器を作ったときの剝離の痕跡やゴツゴツした表面がみられないのが特徴です。そのため、石器として実用はしていないと考えられています。実態が分からないことと、溶けたようななめらかな表面からトトロ口石器と呼ばれるようになりました。

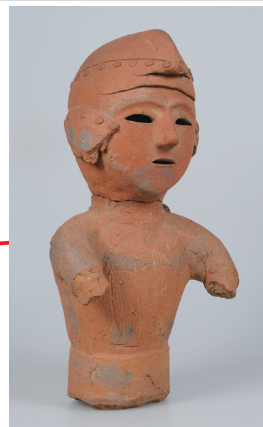
武田石高遺跡のトトロ口石器は、一九八八年の発掘調査で出土し、周辺に分布する土器が田戸下層式のものであることから、縄文時代早期頃の遺物と考えられています。石材には灰色のメノウが使用されています。その他に展示室には、トトロ口石の石鏃やトトロ口石の原石を展示しています。(田中美零)

2021（令和3）年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	回数	所在地	種別	時期	遺構・遺物
1	いちげしもつぼいせき 市毛下坪遺跡	21 次	市毛	試掘	4 月	住居跡 5 基(奈良 1, 平安 1, 時期不明 3), 溝跡 2 条, 土坑 2 基, ピット 15 基を確認。土師器, 須恵器が出土。
2	かつくらごふんぐん 勝倉古墳群 かつくらふじやまいせき 勝倉富士山遺跡	3 次 3 次	勝倉	試掘	4 月	住居跡 2 基(弥生), 土坑 1 基を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
3	ほりぐちいせき 堀口遺跡	37 次	堀口	試掘	4 月	住居跡 3 基(奈良・平安 2, 時期不明 1), 土坑 10 基, ピット 5 基を確認。土師器, 須恵器, 瓦質土器, 陶磁器, 砥石が出土。
4	いちげほんごうぼいせき 市毛本郷坪遺跡	10 次	市毛	試掘	5 月	住居跡 4 基(古墳 1・時期不明 3), 土坑 5 基, ピット 3 基を確認。土師器, 須恵器が出土。
5	ひらいせき 平井遺跡	8 次	金上	試掘	5 月	なし
6	いちげかみつぼいせき 市毛上坪遺跡	34 次	市毛	本調査	5 月	住居跡 3 基(古墳時代)を確認。弥生土器, 土師器, 石器, 砥石, 石製品, 鉄製品が出土。
7	いちげしもつぼいせき 市毛下坪遺跡	22 次	市毛	試掘	6 月	遺構なし。土師器, 須恵器が出土。
8	ほんごうぼいせき 本郷東遺跡	7 次	馬渡	試掘	7 月	溝跡 1 条, 土坑 1 基, ピット 3 基を確認。縄文土器, 近代陶器, 石器が出土。
9	たいせいちよるいせき 大成町遺跡 とのづかごふんぐん 殿塚古墳群	1 次 5 次	大成町	試掘	7 月	溝跡 1 条, 土坑 1 基, 古墳の周溝 1 条を確認。出土遺物なし。
10	かつくらわかみいせき 勝倉若宮遺跡	6 次	勝倉	試掘	7 月	なし
11	かみばいせき 上馬場遺跡	7 次	津田	試掘	7 月	土坑 1 基を確認。遺物なし。
12	にしなかいせき 西中根遺跡	6 次	中根	試掘	7 月	なし
13	ほりぐちいせき 堀口遺跡	38 次	堀口	試掘	8 月	なし
14	いちげいせき 市毛遺跡 いちげかみつぼいせき 市毛上坪遺跡	5 次 35 次	市毛	試掘	8 月	住居跡 2 基(奈良 1, 時期不明 1), 溝跡 2 条を確認。縄文土器, 土師器, 須恵器, 磁器が出土。
15	へたのむじないせき 部田野路 1 遺跡	1 次	部田野	試掘	8 月	なし
16	おおだいらしーいせき 大平 C 遺跡 とのづかごふんぐん 殿塚古墳群	7 次 6 次	大成町	試掘	9 月	住居跡 2 基(弥生, 古墳)を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 石製模造品が出土。
17	いちげかみつぼいせき 市毛上坪遺跡	36 次	市毛	試掘	9 月	住居跡 4 基(古墳 1, 時期不明 3 基), 溝跡 1 条, ピット 2 基を確認。土師器, 須恵器, 陶器が出土。
18	ほんごうぼいせき 本郷東遺跡	8 次	馬渡	本調査	9 月	住居跡 1 基(奈良)を確認。土師器, 須恵器, 石鐙が出土。
19	おおだいらしーいせき 大平 C 遺跡 とのづかごふんぐん 殿塚古墳群	8 次 7 次	大成町	試掘	9 月	住居跡 2 基(時期不明)を確認。遺物なし。
20	おおだいらしーいせき 大平 C 遺跡 とのづかごふんぐん 殿塚古墳群	9 次 8 次	大成町	本調査	10 月	住居跡 1 基(古墳)を確認。縄文土器, 土師器が出土。
21	じぞうねいせき 地蔵根遺跡 かつくらたいやかたおと 勝倉台館跡	5 次 2 次	勝倉	試掘	10 月	住居跡 5 基(古墳 1, 平安 1, 時期不明 3), 溝跡 1 条を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
22	おおぼらうちいせき 大房地遺跡	18 次	金上	試掘	10 月	住居跡 2 基(時期不明), 溝跡 4 条(中世 2, 時期不明 2)を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 瓦が出土。
23	みたんだいせき 三反田遺跡 みたんだごふんぐん 三反田古墳群	9 次	三反田	試掘	10 月	なし
24	じぞうねいせき 地蔵根遺跡	6 次	勝倉	試掘	11 月	井戸跡 1 基(近世)を確認。土師器, 須恵器, 近世土器, 陶磁器, 砥石が出土。
25	いちげほんごうぼいせき 市毛本郷坪遺跡	11 次	市毛	本調査	11 月	住居跡 4 基(奈良・平安 1, 時期不明 3), 土坑跡 8 基(古墳 3, 中世 1, 近世 1, 時期不明 3), 溝跡 1 条(中世)を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器, 内耳土器, 中世土器, 陶磁器, 紡錘車, 砥石, 石器, 鉄製品が出土。
26	いさぎひがしいせき 磯崎東遺跡	1 次	磯崎	試掘	11 月	住居跡 11 基(奈良・平安 4, 時期不明 7), 溝跡 5 条, 土坑 19 基, ピット 36 基を確認。土師器, 須恵器, 石器が出土。
27	おおぼらうちいせき 大房地遺跡	19 次	金上	本調査	12 月	住居跡 1 基, 土坑跡 1 基, 溝跡 2 条(奈良 1, 時期不明 1)を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器, 鉄製品が出土。
28	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	15 次	高野	試掘	12 月	住居跡 2 基(奈良・平安 1, 時期不明 1), 溝跡 1 条を確認。土師器, 須恵器が出土。
29	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	16 次	高野	試掘	12 月	住居跡 4 基, 溝跡 1 条を確認。土師器, 須恵器が出土。
30	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	17 次	高野	試掘	12 月	溝跡 1 条を確認。土師器, 須恵器が出土。
31	いげあきさいせき 飯塚前遺跡	4 次	三反田	試掘	12 月	なし
32	じぞうねいせき 地蔵根遺跡	7 次	勝倉	本調査	1 月	住居跡 1 基, 溝跡 1 条, ピット 2 基を確認。土師器, 須恵器, かわらけが出土。
33	まつばらいせき 松原遺跡	9 次	田彦	試掘	1 月	住居跡 4 基(弥生 1, 古墳 1)を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器が出土。
34	おおだいらせき 岡田遺跡	39 次	三反田	試掘	1 月	住居跡 6 基, 土坑跡 3 基を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器, 陶磁器が出土。
35	おおだいらえいせき 大平 A 遺跡	7 次	大平	試掘	1 月	なし



外野遺跡は、縄文時代中期の小規模な集落跡です。住居跡から注口土器が出土しました。

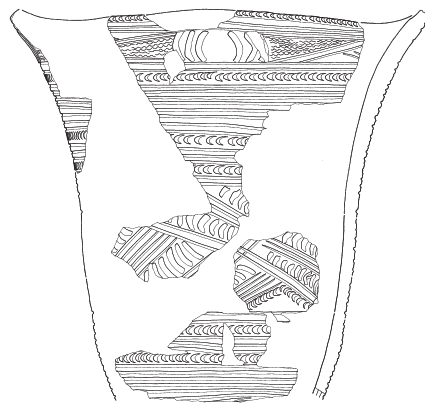


田彦古墳群は、前方後円墳 1 基と円墳 21 基からなる古墳群ですが、現在は数基が残るのみです。写真の埴輪は、前方後円墳から出土したものと思われます。埴輪は武人埴輪で、頭には青を被り、顔や体には青色の顔料が見られます。



(原寸大)

東石川新堀遺跡の土器には、粘土の紐を貼り付けたような文様が見られるだけで、これは「隆起線文土器」と呼ばれています。14000～15000年前に男体山から噴出した今市・七本桜テフラが堆積する土層の上部で検出されました。



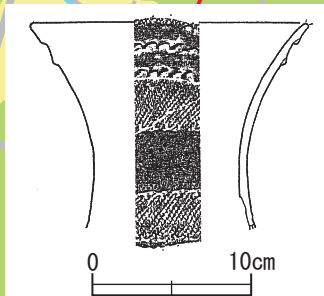
0 10cm

東石川十文字遺跡からは、「田戸下層式」という縄文時代早期の土器が多量に出土しました。全て破片ですが、おおよその文様構成を復元できるものもあります。底部が尖り「尖底土器」と呼ばれる土器の1つです。

ひたちなか市の遺跡9 (大島・田彦)

大島中学区には 10 の遺跡が、田彦中学区には 16 の遺跡がみつかっています。主な遺跡には、縄文時代の東石川新堀遺跡や東石川十文字遺跡、古墳時代の松原遺跡や根崎 A 遺跡、田彦古墳群などがあります。

遺跡の発掘調査は 1980 年代から行われており、2020 年までに 44 回実施されています。縄文時代の東石川新堀遺跡では、縄文時代の最も古い草創期の土器が出土しました。土器は口縁部や胴の上部に粘土帯を巡らす「隆起線文土器」と呼ばれるもので、土器の始まりを知る上で貴重なものです。東石川十文字遺跡では、縄文時代早期の「田戸下層式土器」が出土しています。松原遺跡や根崎 A 遺跡では、古墳時代前期のムラの跡が見つかっています。田彦古墳群では本格的な調査が実施されていませんが、前方後円墳から武人の埴輪が出土しています。



中丸川を那珂市へ少し遡ったところに、弥生時代後期「東中根式」を出土した京塚遺跡があります。



松原遺跡では、古墳時代前期の住居跡が確認されています。そこからは、壺や器台といった土器が出土しました。

2020 年までに発掘調査された住居跡の数
大島中地区：1基 田彦中地区：14基
合計：15基

2020 年までに発掘調査された遺跡 (地図上の●印)

- 大島中地区：東石川遺跡、東石川新堀遺跡、東石川内後遺跡、向山遺跡、外野遺跡、屋敷内遺跡、東石川十文字遺跡
- 田彦中地区：松原遺跡、根崎 A 遺跡、根崎 B 遺跡、雷土 B 遺跡、雷遺跡、田彦古墳群、田彦西原遺跡、堂端遺跡、寄居新田遺跡、寄居新田古墳群、中曽根遺跡



一九六八年、茨城県内で大規模開発に伴う未熟な発掘を体験し（『埋文だより』55掲載）、七月は千葉県滝台遺跡の調査に参加（『埋文だより』54掲載）。二〇日過ぎに帰省し、二三日から東海村平原貝塚の調査に参加した。

平原貝塚は、一九五五年大森信英先生によって纏められた『常陸国村松村の古代遺蹟』にも紹介されている縄文時代中後期の貝塚で、旧真崎浦に面した傾斜面に数か所の貝塚が点在しているが、今回は平原B貝塚の南端部。この調査は国道六号線から原子力機構までの道路新設に伴うもので、七月二三日から二八日の間実施された。調査団は茨城考古学会の井上義安氏を中心に、佐藤次男・伊東重敏・軍司修子・早川章次・谷島静訓氏等会員が参加し、國學院大學生河野実・伊東三保子・昼間孝次・高林均・周東由貴子と瓦吹も参加した。その他、早稲田大学の金子浩昌先生やいわき市在住馬目順一氏、茨城大学生久信田喜一・野内正美氏、日立一高生、太田一・二高生、それに勿来工業生斉藤孝君も参加した。調査を指揮した井上さんは、一九六〇年代から那珂川流域の貝塚の調査研究を進めておられ、初めての貝塚調査の私には学ぶところが多い調査となった。

我々は東海村青年研修所に宿泊した。研修所は木造二階建てだったと記憶しているが、宿舎から平原貝塚まで毎日どのように通ったかが記憶にない。記憶にあるのは、坂道を上りきった道脇の畑から、草だらけの急斜面を下りた場所が発掘地点だった

私的茨城考古学外史一遺跡・人 出会いと別れ一

第5回 発掘三昧への道 県内編2



東海村平原貝塚調査参加者（1968年）
（後列中央：昼間・右：伊藤・左：周東）



瓦吹 堅

こと。その中段の幅一〇mほどの平坦部に幅一m、長さ一五mのトレンチが設定され、掘り始めた。表土層は四〇cmほど、その下に厚さ三〇cm以上の黒褐色土層が堆積し、さらにその下には黒色土層があり、この層中にヤマトシジミの貝層が見られた。貝層はスコップでは歯が立たず、横に矧ぎながら掘り込んだことを記憶している。その一トレンチに直行して南北に二・三・四トレンチを設定し、掘り進めた結果、小貝塚が三地点、人骨も二体検出された。一号人骨は頭骨以外の保存が悪く、二号人骨は頭部を北西に向けた伸展葬だった。同期の昼間君がこの二号人骨と並んで記念写真したのを覚えている。夜は研修所で土器洗い、その作業が終わると卓球などを楽しんだ。

平原貝塚の調査は七月二八日まで実施されたが、私は二六日から日立市久慈町上の台古墳の調査に参加するため途中離脱。この古墳の調査は、曲松遺跡や金井戸遺跡の大型分譲地開発地に隣接していて削平されるため、平原貝塚同様に茨城考古学会が中心となつて行われた。調査団長は太田二高関根忠邦先生、調査員に太田二高関根信和先生、会員の安島志郎・植田友次さん、そして私のほか佐藤政則・小室勉・茅根修嗣君等大学生、太田一・二高生が参加した。古墳は裾部が削られており、径約一〇m、高さ約二mの規模を測り、主体部を検出するため東西・南北の十字に幅二mのトレンチを設置して調査を進めた。調査の結果、主体部は発見されなかったが、周溝の検出状況から、本

来直径一九〜二〇mの円墳であることが判明して八月三日に調査を終了したが、現在団地化したこの住宅街から、あの古墳のあった位置を探すのは不可能だ。

この調査時の宿舎は久慈浜の旅館だった。大学生のほか一部の高校生も宿泊していたと記憶している。朝食と夕食は旅館で食べ、昼食はおにぎりだった。そんな時高根先生が味噌汁を作ろうと太田一高から大鍋を運び込んだ。味噌汁は大学生二人ほどが当番で作ることになったが、高根先生当番のある日のメニューは、現場テントの近くに鬱そうと伸びたヨモギ。水洗いもあまりせずに大鍋に投入して味噌汁完成。味はどうかと口にする、苦くて飲めず。誰も手を出さずに捨てたが、鍋底を見ると泥がたまっていた。またまた高根先生の当番日、トマトの味噌汁が出てきた。食べるとドロドロの中身が熱くて口の中が火傷しそうだった。私の当番にはナスのウサギ入り味噌汁。ナスを半分にしてリングで作るように両耳を立ててウサギを作って具としたが、これはややうけた。また、暑い夏の日照りの中、テントにおかれたスイカは生温くて不味い。この時期の見学者達からの差入といえはスイカ・トマトなどで、この調査参加以来、スイカとトマトが不得意になった参加者が多く、私も最近まで双方には手を出さなかった。

平原貝塚・上の台古墳で撮影した私個人のフィルムは、二〇一一年の地震以来探せずにいるが、平原貝塚は昼間君、上の台古墳は佐藤君からフイ

ルムを借用した。しかし、人骨と記念撮影した昼間君の画像（瓦吹撮影）を紹介できないのが残念である。この発掘の前年頃から、学生達の間には反戦歌が静かに流行していた。フォークル（ザ・フォーク・クルセダーズ）の「戦争は知らない」や岡林信康の「友よ」はよく聞いたし、歌いもした。とくに岡林の「友よ」は、新宿駅の地下広場で直に聞いた鮮明な思い出がある。



日立市上の台古墳（1968年）



**ひたちなか市
埋蔵文化財調査
センターの
ホームページが
できました！**



<https://hitachinaka-maibun.jp/>

ひたちなか市出土石製紡錘車の形態分類と石材

佐々木 義則・矢野 徳也



石製紡錘車の石材調査のようす

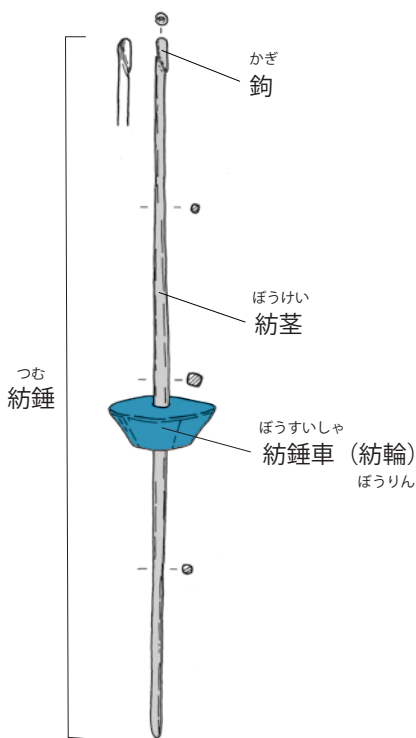
古代の集落遺跡を調査すると、竪穴住居跡から、紡錘車と呼ばれる、糸撚りに用いた紡錘のはずみ車が出土します。本稿では、古墳時代から平安時代にかけてみられる、石製の紡錘車について、その石材と形態分類を再検討した結果をご紹介します。

Ⅰ 石製紡錘車の形態分類について

紡錘車とは大麻や苧麻の繊維に撚りをかけて糸にする道具である「紡錘」につけられたはずみ車のことである「東村純子二〇一一」(図一)。紡錘車は紡輪とも呼ばれる。

紡錘上端の鉤に繊維をひっかけて回し、撚りがかかったら紡茎に巻き取るという作業を繰り返して、糸をつくっていく。中世の絵巻物である石山寺縁起絵巻には、紡錘をつかって糸を撚る女性の姿が描かれており、紡錘の使い方がよくわかる。女性の傍らには、紡錘に回転を与えるための道具も描かれている。

ひたちなか市出土紡錘車の材質変化 紡錘の材質は、紡茎は木・鉄、紡錘車は土・石・鉄・木が用いられた。石製・土製紡錘車は、鉄製紡茎と組み合わせることもあるが、基本的には木製紡



長野県森將軍塚古墳2号土塚墓出土(鉄製紡茎、石製紡錘車)
(東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡織』より引用、加筆)

図1 紡錘の部位名称と使用のようす

があるだろう。また八世紀になると鉄製紡錘車の出現が認められる。東村純子氏は、「鉄製紡錘の出現と普及にともなって(膝の上において)手で転がす方法から、手押台と手押木を用いる方法へと変化があったと仮定したい。」「東村純子二〇一一」と述べられ、鉄製紡錘車の導入が使用法と

茎と組み合わせることが多いようである「東村純子二〇一一」。

ひたちなか市から出土した古墳時代から平安時代の紡錘車から、伴出する土器により時期が判明する九〇点ほどを抜き出し、その材質の変化をうかがってみた(表一、図二)。

古墳時代前期は土製が主体であり、1点のみ石製が存在する。弥生時代後期は全て土製なので、古墳時代前期はそうした様相を継続しているといえる。

古墳時代中期になると材質は大きく変わり、石製が圧倒的に多くなる。この様相は古墳時代後期を経て奈良時代まで続く。古墳時代後期は、中期より土製がやや多くなるが、奈良時代になるとなぜか土製がみられなくなる。その意味を考えるには、今後、八世紀における土製紡錘車の様相をもう少し広い地域で検討して見る必要があるだろう。

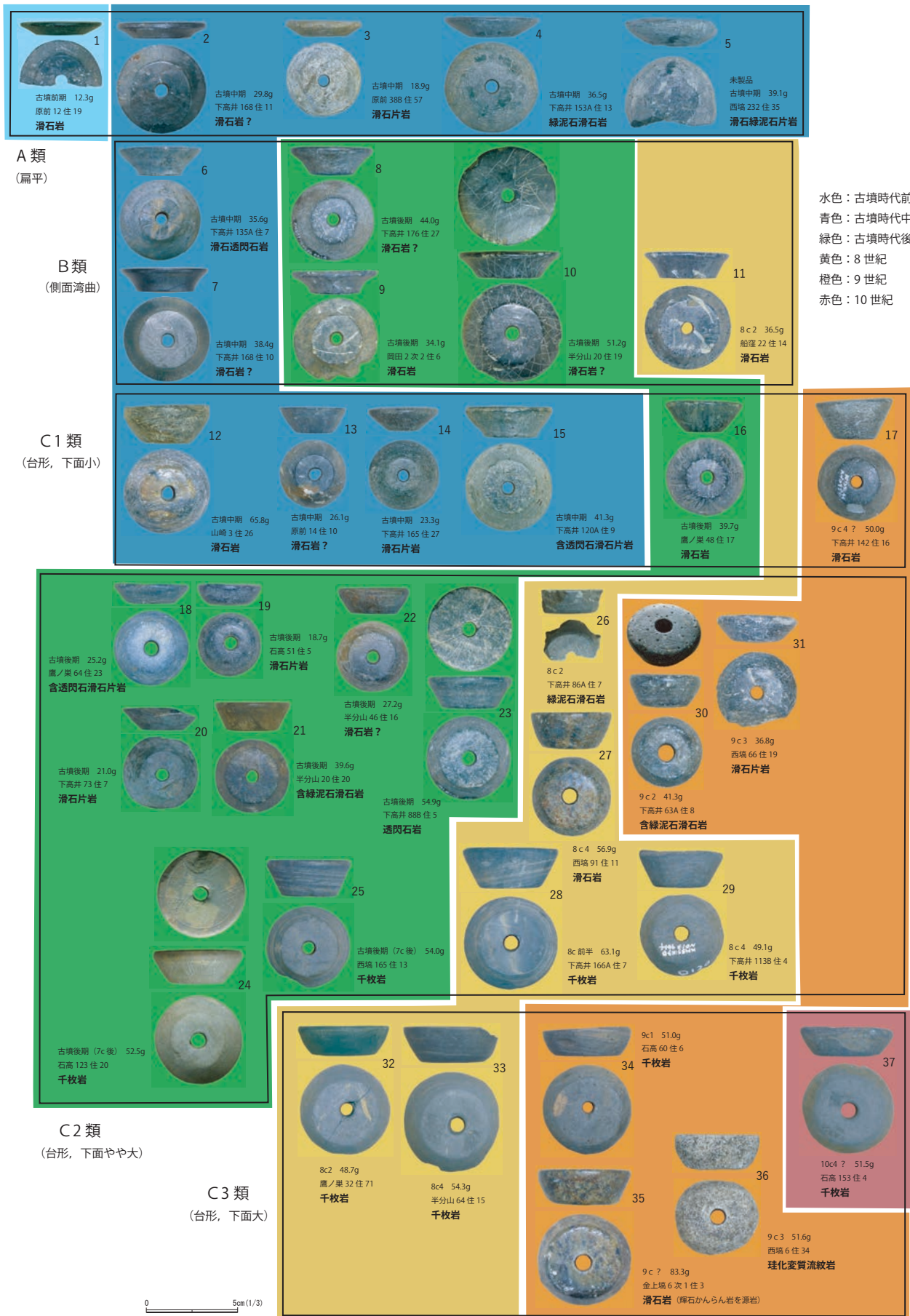


図2 ひとちなかの石製紡錘車

表1 ひたちなか市から出土した紡錘車の材質別出土数

	紡錘車の材質			
	鉄	石	土	土器転用
古墳前期	0	1	6	0
古墳中期	0	10	2	0
古墳後期	0	13	10	0
8世紀	2	8	0	0
9世紀	5	7	16	2
10世紀	0	1	4	3

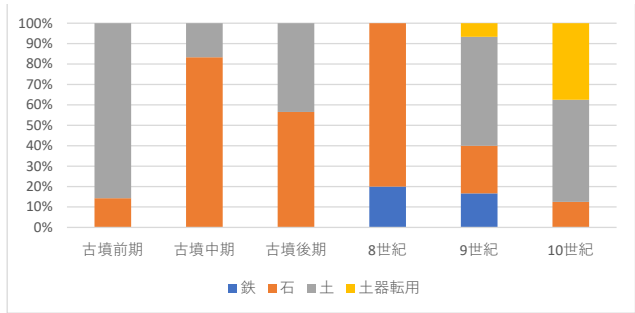


図3 ひたちなか市出土紡錘車の材質変化

関わることを示された。ただし鉄製紡錘車の導入が遅れた当地方では、古墳時代後期に畿内で行われていた鉄製紡錘車に伴う手押台・手押木のみが先に導入されていた可能性を考える必要があるのかもしれない。大倉潤氏が指摘された石製紡錘車表面の痕跡「大倉潤二〇〇二」について調査する必要があると感じている。

九世紀になると石製は減少し、その減少分が土製となる。鉄製の増加はみられないので、八世紀以後に導入された鉄製を使用できる階層は、集落の一部にとどまっており、多数の人々は土製を用いていた。その様相は一〇世紀にはさらに顕著となり、土器転用品の増加も目立つ

ようになっている。

石製紡錘車の形態分類と石材 今回、ひたちなか市出土石製紡錘車の形態分類とその消長について検討を試みた結果、石製紡錘車はA類、B類、C1類、C2類、C3類の5つに分けることができた。

古墳時代前期に出現するA類は、扁平な形状を呈し、古墳時代中期を主とする。古墳時代中期に現れるB類は、A類より厚みのある形状となり、側面が湾曲した丁寧なつくりを特徴とする。奈良時代前半まで継続する。

台形を呈するC類は、下面の大きさにより3つに分類される。下面が小さいC1類は古墳時代中期に出現し、古墳時代後期まで継続するようである。(九世紀の17は他と時期が離れるため古墳時代後期以前の遺物が混入した可能性がある。) C1類より下面がやや大きくなるC2類は、古墳時代後期に出現し九世紀まで継続する。そしてC2類よりさらに下面が大きくなるC3類は、八世紀に出現し一〇世紀まで継続する。

このようにC類は、C1類→C2類→C3類のように順次出現するが、その形態変化は側面削り出しの省力化によるものと思われる。想像になるが古墳時代後期から手押木・手押台のよ

うな回転補助具が使用されたため、削り出しの省力化による回転の不安定化を考慮しなくてもよかつたことが背景にあったのではないだろうか。削り出しを省力化することで側縁部の角度が大きくなり、側縁部が割れにくくなる効果もあったのかもしれない。

次に形態と石材の関係をみると、古墳時代は従来把握されている通り、主に滑石かっせきを用いることがわかる。特に古墳時代前・中期に出現する形態であるA類・B類・C1類は全て滑石を用いていた。古墳時代後期から出現するC2類は、滑石のほか、日立市南東部産と考えられる千枚岩せんまいがん製の紡錘車が七世紀の後半頃からみられる。千枚岩製紡錘車の出現は石材からみた大きな変化といえる。おそらく滑石製紡錘車の供給減少によって、千枚岩製紡錘車の生産が日立市南東部あたりで開始されたと考えられる。八世紀以後は形態がC2・C3類のみとなり(先に述べたように九世紀にみられるC1類17は古墳時代の遺物が混入した可能性を考えている)、千枚岩製のほか滑石製や流紋岩りゅうもんがん製が存在する。滑石岩製の35は八世紀の滑石岩製27と外観が似ており、八世紀以後の滑石として注意したい特徴的な石材である。なお現在のところ、ひたちなか市で最も新しい滑石製の紡錘車は九世紀第3四半期の31である。また流紋岩製の36は砥石に用いられる石材であることから、使われなくなった砥石を削り、紡錘車に転用したものであろう。形状のゆがみはそうした理由によると思われる。(佐々木義則)

II ひたちなか市の石製紡錘車に 用いられている岩石

黒つぼくつややかな紡錘車は蛇紋岩や滑石岩で作られている。そのほか灰色の日立地域の細粒の変成岩や、白色の流紋岩質の砥石を転用したのが見られた。使われている岩石の種類は限られている。蛇紋岩は緑色〜黒色で重みがある蛇紋石を主とする岩石で、それに伴い滑石を産する。蛇紋石はマグネシウム・鉄を、滑石はマグネシウムを含み、ともに水と珪酸を含む鉱物である。日本国内では、滑石類は蛇紋岩に伴って産出している。

蛇紋岩は、かんらん岩（かんらん石や輝石を主成分とする深成岩）を原岩とし、地下深部で水が加わることにより蛇紋石を主とする岩石に変わったものである。地球は中心から、鉄・ニッケルの金属を主とする核、マグネシウムと珪酸を成分とするかんらん石を主とするマントル、表面を薄皮のように覆う岩石が作る地殻からなる。かんらん岩はマントルを作っている主な岩石である。地殻はいくつかのプレートと呼ばれる大きな岩盤に分かれていて、プレートが湧きだす海嶺からプレートが沈み込む海溝に向って移動する。海溝からはさらにマントルに沈み込んでいく。プレートは生まれたばかりは玄武岩質の岩石だが、海洋底を移動する間にプレートの死骸や大陸からなだれ落ちてくる

砂や泥などの堆積物と水分を乗せていき、海溝から沈み込む時にはぎとられて大陸の下縁に擦り付けられて張り付いていく。これが付加体と呼ばれる地質体で、日本列島はジュラ紀の付加体が屋台骨を作っている。

さて、沈み込んだプレートは、乗せた物質をすべてはぎとられてしまうわけでない。一部はプレートと一緒に大陸の地下深くへ持ち込まれていく。次第に圧力が高まるとプレートと堆積物は変成岩になり、水が絞り出されていく。その一部は地殻の融点を下げて、マグマを発生させる。また、マントル物質のかんらん岩と反応し蛇紋岩となり、水を含んで体積が軽くなった蛇紋岩は地殻上部へ変成岩と共に移動してゆく。時に、蛇紋岩の中にヒスイ輝石などの高压で生じた鉱物を含む岩石塊が含まれることがあり、蛇紋岩の起源は地下深いことがわかる。地表に絞り出されたマントルのかげらが蛇紋岩と言える。

日本列島での蛇紋岩の分布は広くない（図4）。主に、高い圧力で作られた結晶片岩を主とする広域変成岩（三波川変成帯、三郡変成帯、神居古潭変成帯など）や地質帯の間に

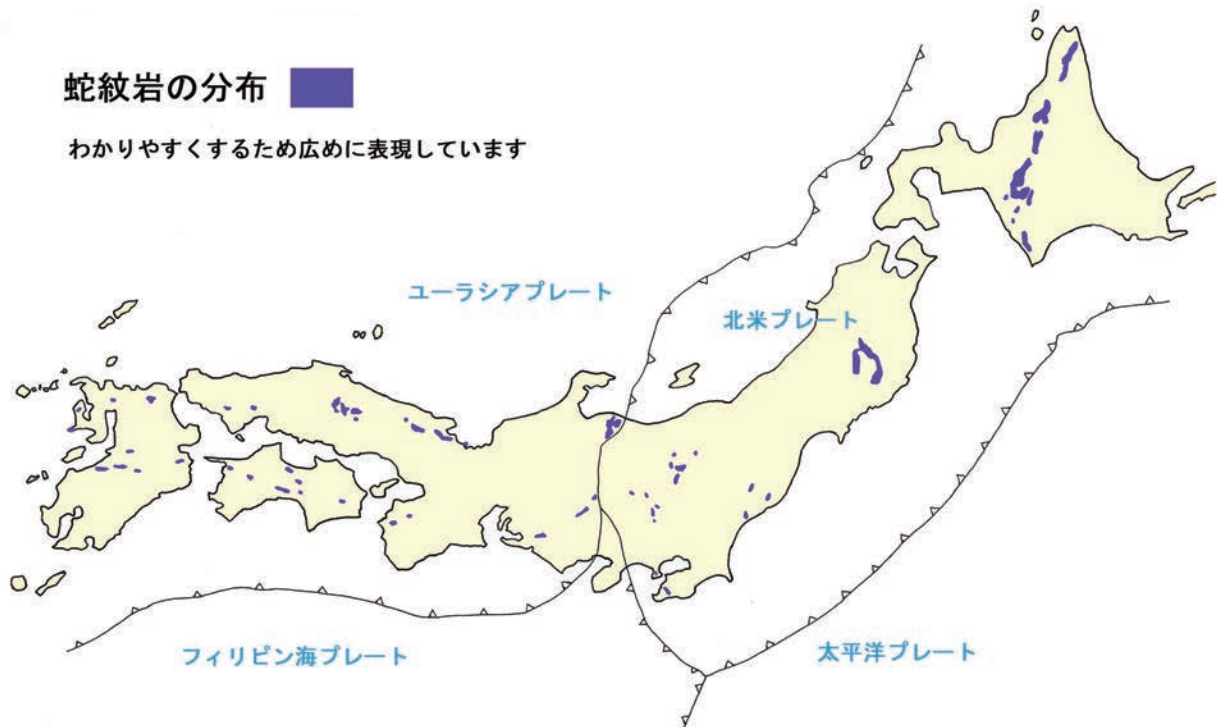


図4 日本の蛇紋岩の分布（シームレス日本地質図を参考に作成）

ある大規模な断層である構造帯に蛇紋岩体が挟み込まれている。関東地方周辺では蛇紋岩の分布は小規模で、長瀬の岩畳で知られる関東山地の埼玉〜群馬にまたがる三波川変成帯に伴うもの、阿武隈山地の西側に散在するもの、谷川岳〜尾瀬付近の上越帯に伴うもの、ヒスイで知られる糸魚川周辺の飛騨外縁帯、神奈川県から山梨県の四万十層群、房総半島から三浦半島の嶺岡層群・葉山層群に伴うものが知られている。また、礫として移動すると、磨滅が早く、大きな礫が遠方に運ばれることは少ない。四万十層群や嶺岡層群・葉山層群に伴われる蛇紋岩が、古第三紀（六六〇〇〜二三〇〇万年前）〜中新世（一六〇〇万年前）であることを除けば、ジュラ紀（二・二三〜一・四五億年前）以前の地質帯に産している。

蛇紋岩には薄く割れやすい片状のものと、割れにくい塊状のものがあり、紡錘車は塊状のものから作られている。出土遺物で従来蛇紋岩とされていたものも、精査すると蛇紋石を主とした蛇紋岩だけでなく、滑石、マグネシウムを多く含む角閃石である透角閃石〜透緑閃石、マグネシウムと鉄を含む緑泥石をそれぞれ主とする岩石も見られる。また、炭酸塩鉱物が含まれることもある。しかしながら、蛇紋岩とそれに伴う岩石は外観も非常に似通っている。もともとなるマントル物質のかんらん岩類の成分が比較的差がないからである。外観だけによる判別は難

しく、含有鉱物の成分による分別も容易でない。また、良質なものは遠方に由来するものの可能性もある。

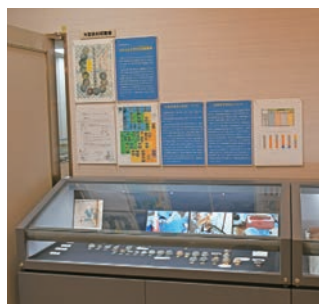
阿武隈山地南部西縁の蛇紋岩に伴い、緑泥石を主とする岩石があり、磁鉄鉱が含まれる。また、ひたちなか市出土のものにはみられないが、嶺岡層群に伴う蛇紋岩には原岩に輝石を多量に含むものがあり、分解せずに残った輝石が特徴的な金色の反射光を示すものがある。このような特徴的な外観の蛇紋岩類は少なく、産地の特定を困難にしている。

滑石も細粒緻密のものは、引っ掻いた時の硬度は小さいが、組織の堅牢さがあり、強度に優れる。関東地方では緻密堅牢な滑石の産出は少なく、美しい外観のものは、遠方の由来である可能性が高い。ただ回すだけならすぐに手に入るものでも良さそうなのだが、これだけ材質にこだわって紡錘車が作られていることに、用途への興味を感じる。

（矢野徳也 筑波山地域ジオパーク推進協議会教育學術部会員
日本地質学会会員）

参考文献 佐々木義則二〇一〇「ワンケース・ミュージアム54 ひ

たちなか市の紡錘車」『ひたちなか埋文だより』第三十二号 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、東村純子二〇一一『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房、大倉潤二〇〇二「石製紡錘車表面の擦痕・剥離痕をめぐって」『日々の考古学』（東海大学考古学教室開設二〇周年記念論文集）、産総研地質調査総合センター「日本シームレス地質図」



二〇二一年秋に実施したワンケースミュージアムは、埋文だよりで今回報告した内容をもとに、ひたちなか市内出土の石製紡錘車を集めた展示を行いました。展示した資料の中には、文様を刻んだものがいくつかありました。右の写真の下高井遺跡出土紡錘車もそのひとつです。上面に間隔をあけて大小の点を穿っており、私にはまるで星を表わしているように見えました。これは北斗七星?などと想像は膨らむいっぽうです。どうか御教示ください。(佐々木義則)

文埋センターの日々 2021 後期

10月

- 一渡邊明氏資料寄贈【三反田・弥生土器】／一「向野A遺跡本調査開始」
- 5「大平C遺跡・殿塚古墳群本調査開始」／一西遊旅行見学／一「ひたちなかまウオーキングの会見学」
- 12-19「地蔵根遺跡・勝倉台館跡試掘調査」／一鈴木素行氏資料寄贈【水戸市小田倉遺跡石器ほか県内海外遺跡採集遺物】／一「ワンケースミュージアム53」モノを測るー考古学最新測量事情ー終了／一「虎塚古墳石室点検」



- ／一「19-26大房地遺跡試掘調査」
- 20「山田孝子氏資料寄贈【写真・地図・絵】」
- 23「中根ときわ会虎塚古墳除草作業」
- 24「ふるさと考古学①」虎塚古墳の謎をとけー2ー講師：さ

かいひろこ氏・三井猛氏・梅田由子氏へ



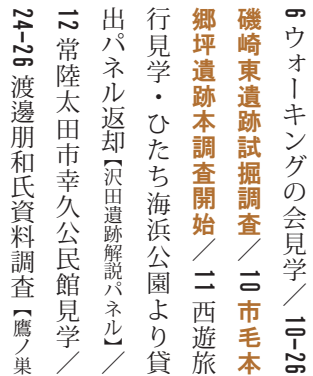
／一茨城県立勝田中等教育学校1年生見学へ



／一「27-28三反田遺跡・三反田古墳

- 群試掘調査」／一「28中根小1年生どんぐり拾い」
 - 29「虎塚古墳一般公開（新型コロナウイルスの影響により中止）」
 - 30「ワンケースミュージアム54」ひたちなか市の石製紡錘車開始
 - 31「埋文だより」第55号刊行
- 11月
- 2「大平C遺跡・殿塚古墳群本調

査終了」



4-10「地蔵根遺跡試掘調査」



- 4「ユーラシア旅行社見学」
 - 6「ウオーキングの会見学」
 - 10-12「磯崎東遺跡試掘調査」
 - 10「市毛本郷坪遺跡本調査開始」
 - 12「西遊旅行見学・ひたち海浜公園より貸出パネル返却【沢田遺跡解説パネル】」
 - 12「常陸太田市幸久公民館見学」
 - 24-26「渡邊朋和氏資料調査【鷹ノ巣遺跡弥生土器ほか】」
 - 27「ふるさと考古学②」フィールド探検【講師：さかいひろこ氏・矢野徳也氏】へ
- 12月
- 1「前原豊氏資料調査【武田遺跡群高杯ほか】」
 - 2-14「大房地遺跡本調査」
 - 3「市毛本郷坪遺跡本調査終了」
 - 7「水戸市立博物館より資料返却【ヤンサマチ使用馬具】」
 - 7-15「高野富士山遺跡試掘調査」
 - 10「向野A遺跡本調査終了」
 - 14-16「飯塚前遺跡試掘調査」
 - 17「ワンケースミュージ

虎塚古墳 花便り

28 ナノハナ

今回ご紹介する花は、春に黄色い花畑として目に付く「ナノハナ（菜の花）」です。ナノハナはアブラナ科アブラナ属の植物です。ナノハナと表記しましたが、実際にはアブラナ属の花はどれも黄色で似通っていることから呼ばれている総称なので、実際は「アブラナ（油菜）」とした方が正しいかもしれません。高さは50cmから1m程で、葉の形は細長い三角形をしています。花は黄色で、十字形に四枚の花びらがあり、中心には雄しべが六本と雌しべが一本あります。三〜五月頃に咲きます。今回掲載した写真の撮影日は、東日本大震災から一ヶ月ちよつとしか経過していない日でした。まだ気持ちが沈んでいるときに、鮮やかな黄色の花を目にして、元気をもらった風景だったことを思い出します。十一年後の二〇二二年も、またこの花に元気つけられることになりそうです。（稲田健一）



2011.04.28

アム5「ひたちなか市の石製紡織車」終了／18 新垣清貴氏資料調査
 「原の寺瓦窯跡瓦」／19 ふるさと考古学③「虎塚古墳の謎をとけ!」③
 (講師:さかいひろ二氏)▶



／21 美浦村文化財センターへ資料貸出【三反田蛭塚貝塚出土縄文土器】／22 千葉県立関宿城博物館資料調査【沢田遺跡製盤関係】・ケーブルテレビ「J J W A Y 取材」▶



1月
 5-7 インターナショナルシップ(東北芸術工科大学3年生)／6-12 地蔵根遺跡本調査／12-25 松原遺跡試掘調査／13 水戸市新庄市民センター

見学／15 橋本勝雄氏資料調査【遠原貝塚石器】／18 岡田遺跡試掘調査開始／23 ふるさと考古学④「虎塚古墳の謎をとけ!」(講師:及川昭文氏・さかいひろ二氏)▶



／25-29 大平A遺跡試掘調査／27 水戸市立博物館資料貸出【三反田蛭塚貝塚出土オジロワシ骨格ほか】

2月
 1 岡田遺跡試掘調査終了／1-9 島ノ原遺跡試掘調査／8 高野富士山遺跡本調査／二第18回企画展「海、古墳・海洋民の痕跡を探る」開始／15-27 磯合遺跡試掘調査／16 小林崇高氏資料調査【傾斜窪遺跡石器ほか】／19 ひたちなか市の考古学第14回①「石製模造品からみた

交流」(講師:佐久間正明氏)／27 ②「ガラス小玉からみた交流」(講師:斎藤あや氏)

3月

1 高野富士山遺跡本調査終了／3-15 内手遺跡試掘調査／5 ③「臨海部の古墳からみた交流」(講師:稲田健一)／12 ④「古墳と海洋民」(講師:西川修一氏)／15-19 大房地遺跡試掘調査／16 芹澤清八氏資料調査【柴田遺跡出土遺物】／17 大田区立郷土博物館資料貸出【半分山遺跡出土勾玉ほか】／24-27 虎塚古墳一般公開／27 ふるさと考古学⑤「笠谷古墳群の謎をとけ!」(講師:さかいひろ二氏・矢野徳也氏)／31 虎塚古墳一般公開・『埋文だより』第56号刊行

入館者状況 (2021.10.1. ~ 2022.3.31)

月	開館日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(人)	
10月	27	297	4 (1)	110 (86)	407	
11月	25	253	5 (0)	103 (0)	356	
12月	23	157	3 (0)	29 (0)	186	
1月	23	178	2 (0)	28 (0)	206	
2月	24	210	2 (0)	67 (0)	277	
3月	27	1034	6 (0)	112 (0)	1146	
合計	149	2129	22 (1)	449 (86)	2578	

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『市報ひたちなか』及び下記ホームページでお知らせします。
<https://hitachinaka-maibun.jp>

編集後記の 虎の子

お隣の大洗町では、令和二年に磯浜古墳群が国指定史跡になり、那珂川を挟んで、二つの国指定史跡の古墳が存在することになった。この機会に、ひたちなか市と大洗町で連携し、両古墳を巡る企画などが実施できないか検討中だ。

そのプレ企画として、令和三年七月一五日(八月三一日)にかけて大洗町で開催された企画展「弥生島と古墳島」とのコラボ企画を実施した。企画展では、「古墳グッズ100」と題して、古墳関連のグッズ約一〇〇アイテムの販売が実施された。そこで、ひたちなか市でも同じ期間中、「虎塚古墳彩色壁画手ぬぐい」の販売を実施した。この手ぬぐいは、大洗町のグッズ販売に参加している「藍寧舎」さんと、地元企業の「三井考測」さんが共同で製作したものである。今回はプレ企画ということで、販売数も五〇枚限定としたが、古墳関連グッズを通して、両史跡の周遊を楽しんでいただくことができた。

このような行政の枠を超えたイベントや交流を今後も増やしていきたい。二〇二三年の虎塚古墳壁画発見五〇周年などを盛り上げていきたい。



大洗町での「虎塚手ぬぐい」販売の掲示風景



ひたちなか埋文だより 第56号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2022年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市申根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ

